

韓国語を母語とする日本語学習者の 「これじゃない」の発話意図とイントネーション —音響分析と聴取に基づく考察—

三木 理

キーワード 「～じゃない」、発話意図、イントネーション、生成、韓国語
を母語とする日本語学習者

1. はじめに

パラ言語的な情報の中でも、発話意図は特定の文末表現形式の有無にかかわらず、イントネーションパターンと結びつくことによって実現される。特に、日本語では、終助詞や「～ませんか」「～じゃない」などの文末形式に特定のイントネーションが重なることで、様々な発話意図が実現される仕組みを持っている。このような発話は、同一の形態素列で構成されていても、イントネーションだけで発話意図が異なるので、日本語学習者にとって注意の必要な表現である。

本稿では、その中でも「～じゃない」という文末形式を採り上げ、韓国語を母語とする日本語学習者が「これじゃない」の持つ発話意図をどのように区別しているか、生成に焦点をあてて分析する。

2. 先行研究

2.1 発話意図「～じゃない」の文法的研究

「～ない」の全般的な用法については、森田（1977）において詳細な分類と分析が行われている。¹⁾一方、日本語における発話意図についての様々な研究は、従来は文法論の分野において、南（1985）、森山（1989）、郡（1997）などの、多くの有益な知見が提供されてきた。そのような流れの中で、「じゃない（か）」の発話意図に関して、その機能と用法を整理・分類した代表的な研究として、森田（1977）、田野村（1988）、御園生（2000）、森山（2002）を採り上げる。これらの研究における知見をまとめると、表1に示すように、「じゃない」はその

表1 先行研究に基づく「じゃない」の用法分類

	否 定	否定以外
森田(注1) (1977)	<ul style="list-style-type: none"> ・否定 「あの人、田中さんじゃないよね」 ・否定疑問 「下宿、あまり静かじゃないの？」 ・否定感動 「なあーんだ、お父さんじゃないのか」 	<ul style="list-style-type: none"> ・確認(同意を求める形式) 「あの人、加藤さんじゃないか」 「そうじゃない？」 ・婉曲(念押し) 「これきれいじゃないの」 ・推量 「こっちのほうがいいんじゃない？」 「あの方は田中さんじゃないか」 (田中さんのことを他人に聞く会話) ・感動・驚嘆 「やあ、山本君じゃないか」 「きれいじゃないか」
田野村(注2) (1988)	<ul style="list-style-type: none"> ・否定辞が否定本来の機能を保っているもの ・話者の納得 「そうか、1は素数じゃないか。」 ・発問・反問 「本当に1は素数じゃないか？」 (1ガ素数デナイト君ハ言ウガ得心デキナイ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手に認識・想起を要求するもの ・推定を表すもの 「よう、山田じゃないか。」 「どうもあの男犯人じゃないか？」
御園生 (2000)	<ul style="list-style-type: none"> ・「打ち消し」の意味で使われる用法 = 否定及び禁止の用法 「あれはただもんじゃない。」 「何、好きじゃない？」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「打ち消し」以外の意味で使われる用法 = 文末詞 「普通のマーケットなんかで売ってるミカンだともっときれいじゃない。」 ・「打ち消し」以外の意味で使われる用法 = 否定とも文末詞とも異なるもの(注3) 「何か完成したもんあるんじゃない？」
森山 (2002)	/	
		<ul style="list-style-type: none"> ・発見・確認 「まあ、いい宝石じゃない！」 ・控えめな主張 「けっこういい宝石じゃない？」

注1:「～ない」の分類のうち、ここでは「じゃない」の形をとるもののみ提示。

注2:田野村(1988)では「じゃないか」という文が考察対象となっている。

注3:「本来疑問の用法で「ジャンナイ(ノカ)」の疑問の終助詞が省略された形」(御園生(2000)、349ページ)

用法から「否定」と「否定以外」という2つの大きな用法に分けられる。

そして「否定」「否定以外」の各用法について、それぞれに挙げられている用例をイントネーションの違いを踏まえて更に考察すると、表2のような4種類に分けられる。即ち、「否定」は文字通りの「否定」と「問い返し」に、「否定以外」は「事実上の肯定」（以下「肯定」）と「推量・確認要求」（以下「推量」）に分類でき、それぞれの発話意図の欄に示したような異なるイントネーションによって表現される。表2最下欄の「「これじゃない」の発話意図」は、本研究で規定したものである。

表2 先行研究に基づく「じゃない」の用法分類・改

	否定		否定以外	
森田 (1977)	<ul style="list-style-type: none"> ・否定 「あの人、田中さんじゃないよね」 ・否定感動 「なあーんだ、お父さんじゃないのか」 	<ul style="list-style-type: none"> ・否定疑問 「下宿、あまり静かじゃないの？」 	<ul style="list-style-type: none"> ・確認（同意を求める形式） 「あの人、加藤さんじゃないか」「そうじゃない？」 ・婉曲（念押し） 「これくらいじゃないの」 ・推量 「こっちのほうがいいんじゃない？」 「あの人は田中さんじゃないか」 ・感動・驚嘆 「やあ、山本君じゃないか」 「きれいじゃないか」 	
田野村 (1988)	<ul style="list-style-type: none"> ・否定辞が否定本来の機能を保っているもの ・話者の納得 「そうか、1は素数じゃないか。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・発問・反問 「本当に1は素数じゃないか？」 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手に認識・想起を要求する 「よう、山田じゃないか。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・推定 「どうもあの男犯人じゃないか？」
御園生 (2000)	<ul style="list-style-type: none"> ・打ち消し（否定文） 「あれはただもんじゃない。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・打ち消し（否定疑問文） 「何、好きじゃない？」 	<ul style="list-style-type: none"> ・文末詞 「もっときれいでいい。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・否定とも文末詞とも異なるもの 「何か完成したもんあるんじゃない？」
森山 (2002)	/		<ul style="list-style-type: none"> ・発見・確認 「まあ、いい宝石じゃない！」 	<ul style="list-style-type: none"> ・控えめな主張 「けっこういい宝石じゃない？」
イントネーション	文末下降	文末上昇	文末下降	文末上昇
「これじゃない」の発話意図	<ul style="list-style-type: none"> ・これとは違う。別の物だ。 [否定] 	<ul style="list-style-type: none"> ・えっ、「これじゃない」だって？ [問い返し] 	<ul style="list-style-type: none"> ・これでいいんだよ。 [事実上の肯定] 	<ul style="list-style-type: none"> ・これでいいと思うけど。 [推量・確認要求]

2.2 発話意図に関する音声学的研究

発話意図とイントネーションの関連については、音声学の分野でも研究が盛んになってきた。音響分析機器の普及や研究方法の多様化とともに、宮城

(1993)、西端他(1996)、福岡(1998)等、多くの研究成果が残されている。

2. 2. 1 発話意図全般に関する音声学的研究

宮城(1993)は、発話意図が異なる9種類の「そうですね」について音響的特徴を分析・比較し、発話意図ごとに音響的な特徴を導き出した。そしてそれらの発話を用いて聴取実験を行い、発話意図が概ね正確に聞き手に伝わることを明らかにした。西端他(1996)は、「ア」と「エ」を単独で発話した際の様々な発話意図について、外国人学習者の発話資料をもとに生成と知覚の両面から分析と考察を行った研究である。福岡(1998)は、「動詞＋ない」(例「食べない」)が文末イントネーションによって勧誘と否定に分かれる点に注目し、これを聴取する日本語話者と中国語話者との間で判断に差が出るかどうかを調べている。この論考では動詞のアクセント型を3種類想定し、それぞれのイントネーションパターンを細かく分析して、聴取の結果と関連づけている。その結果、中国語話者の場合、-2型アクセントの語で、文末の上昇がアクセント核のあるピッチ(文中の最高点)を上回らない場合、勧誘表現として聞き取ることが難しいことが分かった。初級の学習者の場合、勧誘を表す文末ピッチの上昇率が知覚上十分に習得されていないことが示唆された。

2. 2. 2 「～じゃない」の音声学的研究

「～じゃない」の発話意図について実験音声学の分野から考察を行った研究として御園生(2003)が挙げられる。これは自らの考察(御園生(2000))に基づき、「好きじゃない」を具体例として採り上げ、このイントネーションパターンとして「否定下降調・上昇調」「文末詞下降調・上昇調」を想定し、それぞれが「否定」「yes-no疑問文」「肯定」「念押し・確認」の発話意図²⁾を表し分けるかどうか、実際の日本語母語話者による発話資料に基づく音響分析と聴取実験を通じて明らかにしようとした研究である。聴取実験の被験者数が日本語話者のみ10名と少ないこと、発話者に読み方の訓練を受けた者とそうでない者が混在していること(前者に対しては事前に文末の上昇・下降の指示も行っている)など、実験の方法に若干の改善の余地が感じられるが、結果として、下降調においては話し手のピッチパターンと聞き手の解釈に対応関係が見られ、否定と文末詞とをカテゴリーとして区別していることが明らかになった。一方で、上昇調に関しては、下降調のような対応関係が見られなかった。

2. 3 韓国人学習者の日本語のイントネーション

韓国人学習者の日本語イントネーションに関する研究のうち、本稿に多くの

有益な知見を与えてくれるものとして、関（1989）、李（1994）、李（1995）、崔（2003）などが挙げられる。関（1989）、崔（2003）は、読み上げられた日本語文のイントネーションに対する聞き手の印象の評定について検証したものである。³⁾ 李（1994）、李（1995）は、韓国人学習者による日本語疑問文のイントネーションの特徴を分析したもので、文末の上昇のさせ方が不十分であるなど、興味深い指摘が見られる。

3. 生成実験

3.1 目的

前節で規定した「これじゃない」の4つの発話意図を韓国語話者がどのように生成しているか分析するため、韓国語話者を発話被験者（以下発話者）とする実験を実施した。ここでは、発話者の発話が発話意図通りに正しく生成されているかどうか、日本語母語話者による聴取を行った。この実験の結果から、発話意図によって生成にどのような問題があるのかを明らかにする。

3.2 発話資料

表2で示した発話意図の分類に基づき、4つの発話意図が答えとなるような文を作成し、下記のような会話を設定した。問いは1種類、答えは4種類である。

問：「山田さん。山田さんのさがしていた本って、これじゃないですね。」

答A：「これじゃない。別の本だよ。」 [否定]

答B：「これじゃない？ 何をばかなことを言っているの。」 [問い返し]

答C：「これじゃない。何だ、君が持っていたの。」 [事実上の肯定]

答D：「これじゃない？ たぶんこれだと思うよ。」 [推量・確認要求]

3.3 発話者

発話者は表3に示したように、日本に在住している韓国人学習者（以下KJ）5名と、韓国国内に在住している韓国人学習者（以下KR）5名である。発話者の声域を揃えるために、対象は全て女性とした（いずれも20～30代）。いずれの発話者も、事前のアンケート調査の結果、イントネーションの違いによって発話意図が変わる、という事実を知識として有していたことが分かっている。

発話被験者分類	日本在住学習者 (K J)	韓国在住学習者 (K R)
摘要	韓国語を母語とし、東京の大学で勉学を続けている、滞日歴3年以上の学習者。日本語学習歴は5年以上。学習者。K J 1、2は慶尚道方言話者、それ以外はソウル方言話者。	韓国語を母語とし、韓国の大学で日本語を勉強している学習者。日本語学習歴は2～4年。慶尚道方言話者。
発話被験者数	5名 (K J 1～K J 5)	5名 (K R 1～K R 5)

3. 4 収録方法

上記の会話について、「問」を筆者が担当し、「答」を発話者に発話してもらった。発話者には各文の意味・文脈を事前に説明し、理解・想定してもらったが、具体的なイントネーションパターンは例示せず、各自の判断に任せた。その上で、「問」(あらかじめテープに収録したもの)を聞いて、これに対して普通の会話のような調子で、感情を込めずに答えるように発話を依頼した。発話は各例2回ずつ行ってもらい、これらを録音した。⁴⁾

3. 5 発話意図の判定

発話者が「これじゃない」を意図通りに発話しているかどうかを判定するために、日本語母語話者(詳細は以下)に聴取を依頼した。発話者の発話のうち、「これじゃない」の部分だけを聴取者に聞いてもらい、この後にどの文が続くかを想定し、表4の4つの候補の中からひとつ選択する、という形で発話意図を判定してもらった。

表4 聴取実験回答用紙(抜粋)

<p>それでは、聴取実験を始めます。練習の時と同様、1問につき、同じ音声を2回聞いていただきますので、これに続くと思われる文をa～dの中から1つ選んで、記号に○をつけて下さい。</p>	
1. a. 別の本だよ。	[否定]
b. 何をばかなことを言ってるの。	[問い返し]
c. 何だ、君が持っていたの。	[事実上の肯定]
d. たぶんこれだと思うけど。	[推量・確認要求]

実験では、10名の発話者(K J、K R各5名)による4通りの発話があるので、聴取者には合計40発話を聞いてもらった。なお、事前に発話資料で示したものと同一4通りの会話を各2回ずつ聞いてもらい、練習問題を4問行った後、各例1問につき2回ずつ聞いてもらった。

3. 6 聴取者

聴取者は東京およびその隣接地域で出生し、同地に中学校卒業時まで居住した（現在も居住している）日本語母語話者42名（男性28名、女性14名、年齢はいずれも20～30歳代）である。

4. 結果

表5は、発話者K JおよびK Rの発話に対する、聴取者の正答率と回答の内訳を示したものである。正答率と回答の内訳を併記することによって、聴取者が発話意図を正しく聞き取っている程度のみならず、聞き取り方の傾向をおおまかに把握することができる。例えば、K Jによる「否定」の発話（計5例）に対する聴取者の正答率は92.4%、回答数と内訳は「否定」194例、「問い返し」11例、「肯定」2例、「推量」3例であったことが示されている。統計的な有意差の有無に関しては、K J、K Rそれぞれの発話意図間の正答率と、各発話意図に関する発話者間の正答率について、t検定を実施して調べた。それぞれの検定結果は、表5の下欄と右側に提示した。

表5 各種「これじゃない」に対する回答－発話者別比較

発話者K Jの発話						発話者K Rの発話						発話者間 有意差		
発話意図	正答率と回答内訳					発話意図	正答率と回答内訳							
	正答率	否定	問返	肯定	推量		正答率	否定	問返	肯定	推量			
否定	92.4%	194	11	2	3	否定	89.0%	187	18	3	2			
問い返し	64.3%	0	135	2	73	問い返し	18.1%	35	38	13	124	**		
肯定	89.5%	7	13	188	2	肯定	3.3%	157	19	7	27	**		
推量	87.6%	1	3	22	184	推量	69.5%	13	35	16	146	**		
K J 全体	83.5%						K R 全体	45.0%						**
発話意図間 正答率有意差	否定>肯定>推量>>>問返 (※>>>: p<.01>:有意差なし)					発話意図間 正答率有意差	否定>>>推量>>>問返>>>肯定 (※ >>>: p<.01 >:有意差なし)					(** : p<.01)		

まず、発話者K Jの発話に対する正答率を見ると、全体で83.5%となっている。4つの発話意図の中では、「否定」の発話の正答率が90%以上で最も高く、「肯定」「推量」の発話についても正答率は90%に近い。これらの発話に関しては、K Jは発話意図を概ね正しく発話しているといえる。これに対して、「問い返し」の発話の正答率は64.3%で、他の発話に比べて有意に低い。K Jにとって、「問い返し」の発話だけが、意図通りの発話が困難であったことを示してい

る。「問い返し」に対する回答内訳を見ると、「推量」という判定が「問い返し」の半数以上に達し、これ以外の判定はほとんどない。従って、K Jの「問い返し」の発話の特徴は、「推量」と酷似していることが考えられる。

一方で、発話者K Rの発話に対する正答率を見ると、全体で45%と低く、K Jの発話に比べて有意に低い結果になっている。その内容を見ると、「否定」の発話の正答率はK Jと同様に高いが、それ以外の発話に対する正答率はK Jと比べて有意に低く、中でも「問い返し」「肯定」の発話に対する正答率が著しく低い。これらの発話に対する正答率の低さが、K Rの発話に対する全体的な正答率を引き下げている要因といえる。これらのことから、K Rは「否定」に関しては発話意図を正しく発話しているが、それ以外の発話では発話意図を正しく表していないことが分かる。回答内訳を見ると、「問い返し」は「推量」に、「肯定」は「否定」に聞き取られる傾向があることから、発話者K Rの「問い返し」「肯定」の発話が、それぞれ「推量」「否定」の発話と酷似していることが推測される。

聴取の傾向について、K J、K Rそれぞれの発話者別に判定結果を示したのが表6である。各発話者の発話に対する回答として、最も多い発話意図は何であったかを示している。各発話者の発話意図と異なるものについては、斜字で示した。これを見ると、K Jに関しては、K J 1の「問い返し」の発話が「推量」に聞き取られていることを除いて、発話者の発話意図が正しく聞き取られていることが分かる。即ち、K J 2～5は4つの発話意図をイントネーションを変えて発話し分けている。一方、K Rに関しては、4種類の発話の区別がどの話者も難しいことが分かる。K R 1を除いて2種類の区別しかできておらず、特にK R 2は「推量」以外は全て「否定」のパターンで発話し、K R 3は「否定」以外は全て「推量」のパターンで発話していることが示されている。ただ、K Rでも「否定」と「推量」に関しては発話意図通りの発話ができている。これらのことから、特にK Rの「問い返し」と「肯定」の発話の生成に何らかの問題があることが考えられる。

表6 各発話者の発話に対して最も多かった回答(斜字は話者の発話意図と異なるもの)

	発話意図					発話意図			
	否定	問い返し	肯定	推量		否定	問い返し	肯定	推量
K J 1	否定	<i>推量</i>	肯定	推量	K R 1	否定	問い返し	否定	推量
K J 2	否定	問い返し	肯定	推量	K R 2	否定	<i>否定</i>	否定	推量
K J 3	否定	問い返し	肯定	推量	K R 3	否定	<i>推量</i>	<i>推量</i>	推量
K J 4	否定	問い返し	肯定	推量	K R 4	否定	<i>推量</i>	否定	推量
K J 5	否定	問い返し	肯定	推量	K R 5	否定	<i>推量</i>	否定	推量

5. 音響分析

5. 1 目的

日本語母語話者による聴取の結果から、K J の発話は「問い返し」が「推量」に判定される例があること、K R の発話は「問い返し」が「推量」に、「肯定」が「否定」に判定される例があることが分かった。これは、発話者個人がイントネーションによって発話意図を区別することが十分にできていないことが原因と考えられる。本節では、異なる発話意図に判定された発話がどのような音響的特徴を持っているか、分析する。

5. 2 音響分析の方法

音声分析ソフト「Praat」を使用し、発話資料の音声（WAVファイル）からF0曲線を抽出した。⁵⁾ このF0曲線から、ピッチの最高点、最低点、文中・文末の下降幅、全体のピッチレンジを測定して分析・考察の材料とした。

5. 3 発話被験者

表7に示したように、前節での発話被験者K J、K R各5名に加えて、比較のため日本語母語話者10名（以下J P、いずれも20～30歳代の女性）にも発話を依頼した。発話資料と録音方法は前節のK J、K Rと同様である。

表7 発話被験者（音響分析用）

発話被験者分類	日本語母語話者（J P）	日本在住学習者（K J）	韓国在住学習者（K R）
摘要	東京及びその隣接地域で出生し、同地に中学校卒業時まで居住した（現在も居住している）日本語母語話者。	韓国語を母語とし、東京の大学で勉学を続けている、滞日歴3年以上の学習者。日本語学習歴は5年以上。K J 1、2は慶尚道方言話者、それ以外はソウル方言話者。	韓国語を母語とし、韓国の大学で日本語を勉強している学習者。日本語学習歴は2～4年。慶尚道方言話者。
発話被験者数	10名（J P 1～J P 10）	5名（K J 1～K J 5）	5名（K R 1～K R 5）

5. 4 分析と考察

5. 4. 1 「問い返し」と「推量」

図1は、各発話者が発話した「問い返し」と「推量」を表す「これじゃない」のピッチ曲線を、発話者別にグラフ化したものである。横軸は時間長を1/1000秒単位で表しており、縦軸は声の高さの変化を50Hzと基点とするセミトーン値で示している。⁶⁾ マーカーの色の濃淡は発話者の別を表し、発話者ごとに

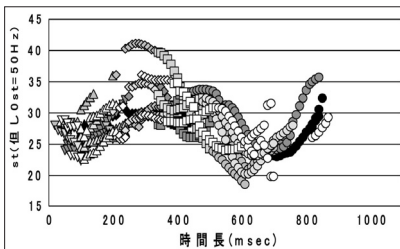


図1-1 発話者JP 1~10の「問い返し」の「これじゃない」

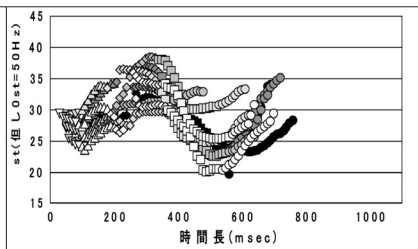


図1-4 発話者JP 1~10の「推量」の「これじゃない」

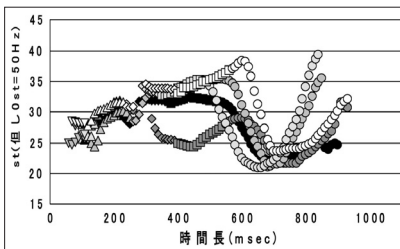


図1-2 発話者KJ 1~5の「問い返し」の「これじゃない」

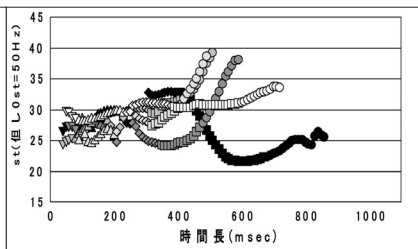


図1-5 発話者KJ 1~5の「推量」の「これじゃない」

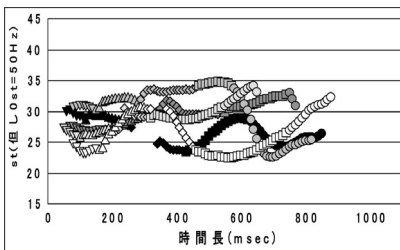


図1-3 発話者KR 1~5の「問い返し」の「これじゃない」

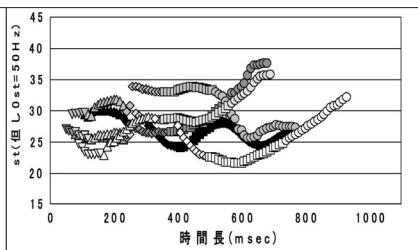


図1-6 発話者KR 1~5の「推量」の「これじゃない」

図1 各発話者による「問い返し」(左側)と「推量」(右側)の「これじゃない」のピッチ曲線

ピッチの変化のしかたが異なる様子を示している。マーカーの形(▼▲◆■●)はそれぞれ「こ」「れ」「じゃ」「な」「い」の各拍を表し、各拍の持続時間や、拍ごとの高低変化の様子を示している。

図1-1と1-2からは、KJが「問い返し」の発話意図を表す時、共通のイントネーションパターンで発話していること、更にその特徴がJPのピッチ曲線と同様であることが分かる。そのパターンとは、「こ」から「れ」にかけて

上昇した後、「じゃ」「な」と平坦に推移するかゆるやかに上昇し、「い」で急激に下降した後上昇して終わる、というものである。これに対して、図1-3のKRのピッチ曲線を見ると、KJやJPと類似したパターンとKJやJPでは見られないパターンとが混在している。

図1-4と1-5からは、KJが「推量」の発話意図を表す時、2種類のイントネーションパターンが存在し、そのいずれもがJPの発話にも見いだされることが分かる。2種類のうちのひとつは、「こ」から「れ」「じゃ」にかけて上昇した後、「な」から下降を始め、「い」で上昇に転じるパターン、もうひとつは「こ」から「れ」にかけて上昇した後平坦に推移し、「い」で上昇して終わるパターンである。前者のパターンは「問い返し」と似ているが、文末の下降-上昇のしかたが異なっている。一方、図1-6のKRのピッチ曲線を見ると、「問い返し」の場合と同様、JPやKJと類似したパターンと、むしろ「問い返し」に似たパターンとが混在している。

図2-7は、各発話者の「問い返し」と「推量」の発話意図を表す「これじゃない」のうち、「じゃない」の部分の高低変化について、「じゃ」の母音の開始点⁷⁾を基点としてセミトーン単位で示したグラフである。具体的な高低変化のセミトーン値は、表8-13に提示した。KJとKRについては、表9、10、12、13にあるように、聴取の結果を発話者別に提示し、最も多かった回答を太字で表記した。

図3を見ると、KJの「問い返し」の発話に、「な」までの平坦な推移と「い」での下降-上昇というイントネーションが使われていること、このイントネーションが図2のJPとも共通であることが示されている。一方図5と図6からは、「な」にかけて下降した後「い」で上昇するパターンと、「じゃ」の母音以降ゆるやかに上昇するパターンが見いだされる。「推量」におけるこの2つのパターンは、「い」の上昇という点で共通しており、なおかつ「問い返し」の特徴と対照をなしている。

これらのことを念頭に、発話意図と異なる回答の多かった発話について見ると、図3のKJ1と図4のKR3の「問い返し」は、「い」での下降-上昇は「問い返し」の特徴と同じであるが、「な」の母音からの下降は「推量」の特徴を示している。図4のKR4とKR5の発話は「い」が上昇しており、「問い返し」ではなく「推量」の特徴を示していることが分かる。これらの発話者は、「推量」の発話において、図6や図7で分かる通り「問い返し」と同様のイントネーションで発話し、なおかつ聴取でも「推量」という回答を最も多く集めている。これらのことから、「問い返し」を「推量」と判定された発話者は、この2つの発話意図をイントネーションで表し分けることができずに、一種類の

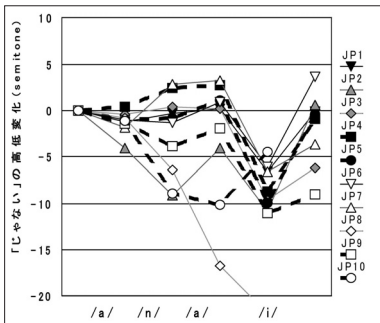


図2 発話者 J P の「問い返し」発話における「じゃない」の高低変化

表8 発話者 J P の「問い返し」発話における「じゃない」の高低変化

	(単位: semitone)				ピッチ レンジ	
	/a/	/n/	/a/	/i/		
J P 1	-1.2	0.9	0.5	-6.8	6.5	7.4
J P 2	-4.0	-5.1	5.1	-6.8	11.4	11.4
J P 3	-0.4	0.8	-0.2	-9.8	3.4	10.1
J P 4	0.4	2.0	0.4	-11.5	7.8	11.8
J P 5	-1.0	0.2	1.9	-11.0	9.5	11.0
J P 6	-1.0	-0.3	2.2	-7.0	9.8	9.8
J P 7	-1.8	4.7	0.4	-9.9	3.0	10.3
J P 8	-0.8	-5.6	-10.3	-5.3		22.6
J P 9	-1.4	-2.4	1.9	-9.1	2.0	11.6
J P 10	-1.1	-7.8	-1.2	5.7		11.9
平均	-1.2	-1.3	0.1	-7.2	6.7	11.8

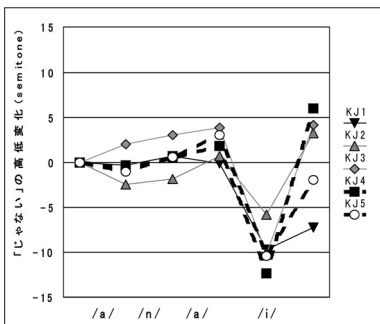


図3 発話者 K J の「問い返し」発話における「じゃない」の高低変化

表9 発話者 K J の「問い返し」発話における「じゃない」の高低変化と聴取結果

	(単位: semitone)				ピッチ レンジ	
	/a/	/n/	/a/	/i/		
K J 1	-0.3	1.0	-0.8	-9.6	2.5	9.8
K J 2	-2.4	0.6	2.5	-6.5	9.1	9.9
K J 3	2.0	1.1	0.8	-14.1	14.4	14.4
K J 4	-0.6	1.1	1.3	-14.1	18.3	18.3
K J 5	-1.0	1.6	2.5	-13.5	8.5	14.7
平均	-0.5	1.1	1.3	-11.6	10.6	13.4

	正答率と回答内訳				推量
	正答率	否定	問返	肯定	
K J 1	22%	0	9	0	33
K J 2	64%	0	27	0	15
K J 3	81%	0	34	0	8
K J 4	64%	0	27	1	14
K J 5	91%	0	38	1	7

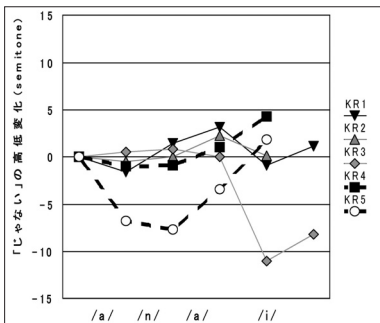


図4 発話者 K R の「問い返し」発話における「じゃない」の高低変化

表10 発話者 K R の「問い返し」発話における「じゃない」の高低変化と聴取結果

	(単位: semitone)				ピッチ レンジ	
	/a/	/n/	/a/	/i/		
K R 1	-1.6	3.1	1.7	-4.1	2.1	5.4
K R 2	-0.5	0.6	2.2	-2.1		3.6
K R 3	0.6	0.3	-0.8	-11.1	2.8	12.2
K R 4	-1.0	0.1	2.0	3.2		5.5
K R 5	-6.7	-1.0	4.3	5.3		9.8
平均	-1.8	0.6	1.9	-1.8	*2.5	7.3

	正答率と回答内訳				推量
	正答率	否定	問返	肯定	
K R 1	41%	9	17	2	14
K R 2	2%	25	1	3	13
K R 3	36%	0	15	3	24
K R 4	0%	0	0	1	41
K R 5	12%	1	5	4	32

イントネーションー「推量」のイントネーションーで発話しているといえる。K R 2 は「問い返し」の発話で「否定」と回答されているが、これは後述する「否定」のイントネーションで発話されているためと考えられる。

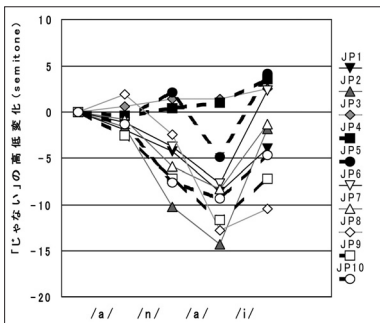


図5 発話者 J P の「推量」発話における「じゃない」の高低変化

表11 発話者 J P の「推量」発話における「じゃない」の高低変化

	(単位: semitone)				ピッチレンジ
	/a/	/n/	/a/	/i/	
J P 1	-1.9	-2.3	-4.4	4.7	8.8
J P 2	-1.6	-8.6	-4.1	12.5	14.5
J P 3	0.6	0.8	0.0	1.2	2.7
J P 4	-0.4	0.8	0.6	2.6	4.0
J P 5	-0.6	2.7	-6.9	9.0	10.7
J P 6	-1.1	-2.6	-4.0	10.0	10.0
J P 7	-0.8	-5.1	-2.4	7.0	9.8
J P 8	1.9	-4.3	-10.4	2.4	15.8
J P 9	-2.5	-4.7	-4.4	4.4	11.6
J P 10	-1.3	-6.3	-1.7	4.7	10.1
平均	-0.8	-3.0	-3.8	5.9	9.8

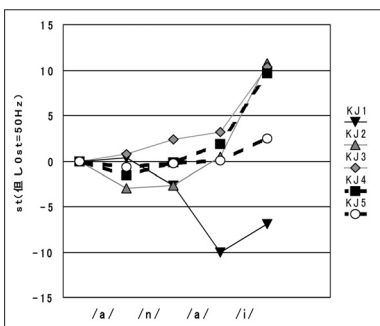


図6 発話者 K J の「推量」発話における「じゃない」の高低変化

表12 発話者 K J の「推量」発話における「じゃない」の高低変化と聴取結果

	(単位: semitone)				ピッチレンジ
	/a/	/n/	/a/	/i/	
K J 1	0.4	-3.0	-7.4	3.1	11.3
K J 2	-2.9	0.3	3.1	10.3	14.0
K J 3	0.8	1.6	0.8	7.2	10.5
K J 4	-1.5	1.4	2.0	7.8	11.2
K J 5	-0.6	0.4	0.3	2.4	3.2
平均	-0.8	0.1	-0.2	6.2	10.0

	正答率と回答内訳				推量
	正答率	否定	間違	肯定	
K J 1	95%	0	0	2	40
K J 2	91%	1	1	2	38
K J 3	69%	0	1	12	29
K J 4	91%	0	1	3	38
K J 5	93%	0	0	3	39

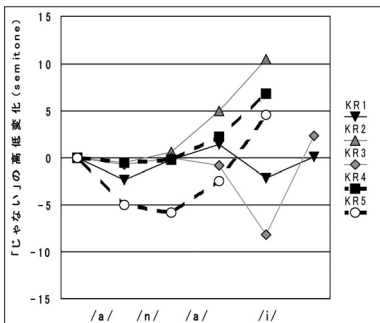


図7 発話者 K R の「推量」発話における「じゃない」の高低変化

表13 発話者 K R の「推量」発話における「じゃない」の高低変化と聴取結果

	(単位: semitone)				ピッチレンジ	
	/a/	/n/	/a/	/i/		
K R 1	-2.3	2.1	1.6	-3.5	2.2	4.0
K R 2	-0.5	1.1	4.4	5.5		11.2
K R 3	-0.7	0.7	-0.8	-7.3	10.4	8.6
K R 4	-0.5	0.3	2.4	4.6		7.7
K R 5	-5.0	-0.8	3.4	7.0		10.6
平均	-1.8	0.7	2.2	1.3	*6.3	8.4

	正答率と回答内訳				推量
	正答率	否定	間違	肯定	
K R 1	43%	9	14	1	18
K R 2	88%	0	1	4	37
K R 3	64%	1	11	3	27
K R 4	91%	0	0	4	38
K R 5	62%	3	9	4	26

5. 4. 2 「否定」と「肯定」

図8は、各発話者が発話した「否定」と「肯定」を表す「これじゃない」のピッチ曲線を、発話者別にグラフ化したものである。

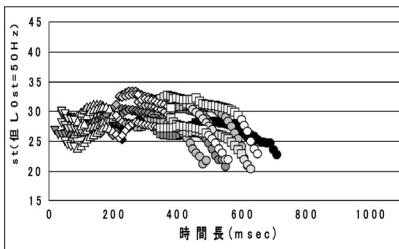


図8-1 発話者JP1~10の「否定」の「これじゃない」

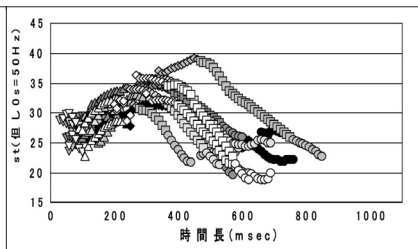


図8-4 発話者JP1~10の「肯定」の「これじゃない」

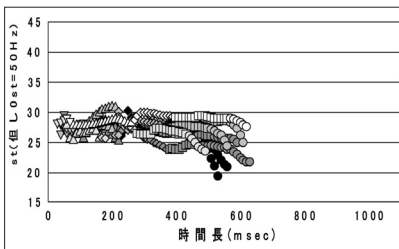


図8-2 発話者KJ1~5の「否定」の「これじゃない」

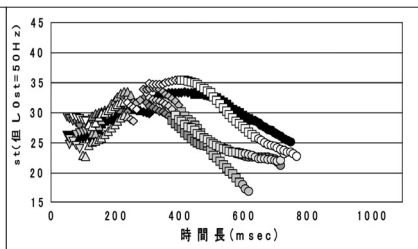


図8-5 発話者KJ1~5の「肯定」の「これじゃない」

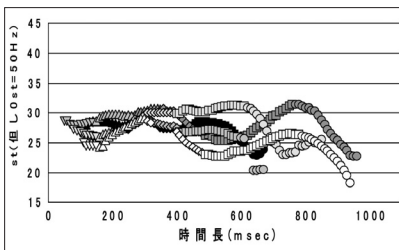


図8-3 発話者KR1~5の「否定」の「これじゃない」

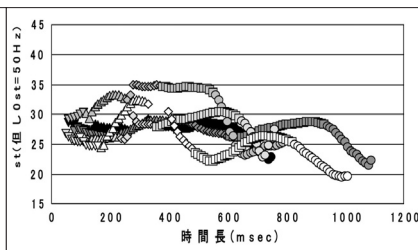


図8-6 発話者KR1~5の「肯定」の「これじゃない」

図8 各発話者による「否定」(左側)と「肯定」(右側)の発話のピッチ曲線

図8-1と8-2からは、KJが「否定」の発話意図を表す時、「こ」から「れ」にかけて少し上昇した後「な」まで平坦に推移し、文末の「い」だけが下降するイントネーションを用いていること、そのパターンはJPでも同様であることが分かる。一方、図8-3のKRのピッチ曲線を見ると、KJやJPと同様のパターンと、「じゃ」で下降した後「な」で上昇するパターンの2つが認められる。後者は、「これ」を尾高型アクセントで発話した結果と考えられる。またJPやKJに比べて、持続時間が長くなっている。学習歴が短いこと

から、まだJ PやK Jのような速度で発話ができないためと考えられる。

図8-4と8-5からは、K Jが「肯定」の発話意図を表す時、「こ」から「じゃ」まで上昇した後、文末まで下降するイントネーションで発話していること、このパターンがJ Pと同様であることが読み取れる。「否定」と比べると、文末の下降のしかたが異なっている。また、「否定」に比べてピッチレンジが広がっているのも特徴である。これに対して図8-6のKRのパターンは、K JやJ Pの「肯定」とは異なっており、むしろKRの「否定」のパターンと似ていることが分かる。ピッチレンジも、「否定」の場合と大きく変わっていない。

図9~14は、図2~7と同じ要領で、各発話者の「否定」と「肯定」の発話のうち、「じゃない」の部分の高低変化を示したものである。同様に表14~19は、「じゃない」の高低変化のセミトーン値を示し、表15、16、18、19には当該発話における発話者個別の聴取結果を示した。

図9および図10を見ると、「な」までの平坦な推移と「い」での下降という「否定」に共通の特徴が現れている。一方で図12と13からは、「な」の子音から（一部は「じゃ」の母音から）文末まで下降していく「肯定」共通のパターンが読み取れる。この特徴を念頭に発話意図と異なる回答の多かった発話について見ると、図14のKR 1、2、4、5の発話は、「な」の母音から下降する「肯定」の特徴ではなく、「い」で下降する「否定」の特徴を示していることが分かる（前述のKR 2の「問い返し」もこの特徴を示している—図4参照）。これらの発話者の「否定」の発話の特徴を図11と表16で見ると、図14と表19と同様であり、なおかつ聴取でも「否定」の回答が最も多くなっている。これらのことから、「肯定」を「否定」と判定された発話者は、この2つの発話意図をイントネーションで表し分けることができずに、一種類のイントネーション—「否定」のイントネーション—で発話しているといえる。KR 3の「肯定」が「推量」と回答されているのは、「な」の母音で下降し文末が上昇する「推量」のイントネーションが用いられているためと考えられる。KR 4も文末が上昇しているが、40msecで4.6st（図8-6および図14参照）と短時間かつ急激であったため、上昇が聞き取られず、「い」で下降する「否定」に聞き取られたものと推測される。KR 3の文末上昇は130msecで2.1st（図8-6および図14参照）と長時間であったため、緩やかでありながらも文末の上昇が明確に聞き取られたものと考えられる。

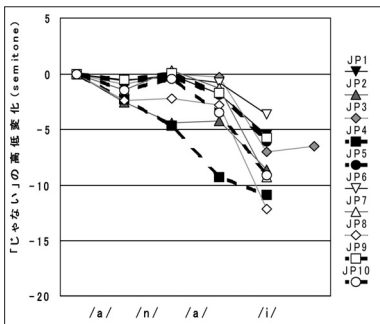


図9 発話者JPの「否定」発話における「じゃない」の高低変化

表14 発話者JPの「否定」発話における「じゃない」の高低変化

	(単位: semitone)				ピッチレンジ
	/a/	/n/	/a/	/i/	
JP 1	-0.6	0.5	-1.7	-3.7	5.4
JP 2	-2.5	-1.9	0.2	-4.4	8.6
JP 3	-0.9	0.9	-0.3	-6.7	7.3
JP 4	-2.3	-2.3	-4.7	-1.6	10.8
JP 5	-0.7	0.4	-1.6	-4.2	6.2
JP 6	-0.5	0.2	-0.5	-2.8	3.1
JP 7	-1.4	1.7	-1.6	-8.0	9.7
JP 8	-2.4	0.2	-0.6	-9.3	12.4
JP 9	-0.5	0.6	-1.8	-4.0	5.9
JP 10	-1.4	1.0	-3.1	-5.6	9.4
平均	-1.3	0.1	-1.6	-5.0	7.9

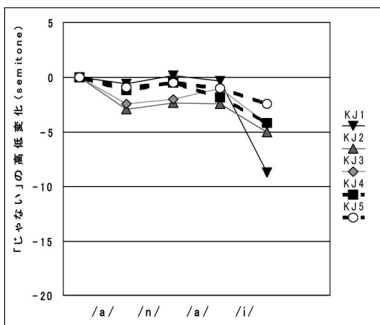


図10 発話者KJの「否定」発話における「じゃない」の高低変化

表15 発話者KJの「否定」発話における「じゃない」の高低変化と聴取結果

	(単位: semitone)				ピッチレンジ
	/a/	/n/	/a/	/i/	
KJ 1	-0.6	0.8	-0.5	-8.4	9.4
KJ 2	-2.9	0.6	-0.1	-2.6	5.0
KJ 3	-2.4	0.4	1.0	-3.3	5.1
KJ 4	-1.2	0.7	-1.3	-2.4	4.2
KJ 5	-0.9	0.4	-0.5	-1.4	2.4
平均	-1.6	0.6	-0.3	-3.6	5.2

	正答率と回答内訳				
	正答率	否定	問返	肯定	推量
KJ 1	95%	40	0	2	0
KJ 2	100%	42	0	0	0
KJ 3	86%	36	6	0	0
KJ 4	91%	38	4	0	0
KJ 5	91%	38	1	0	3

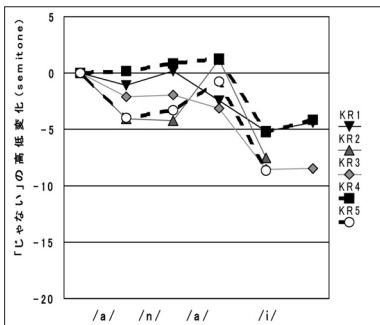


図11 発話者KRの「否定」発話における「じゃない」の高低変化

表16 発話者KRの「否定」発話における「じゃない」の高低変化と聴取結果

	(単位: semitone)				ピッチレンジ	
	/a/	/n/	/a/	/i/		
KR 1	-1.1	1.3	-2.6	-2.7	0.7	5.6
KR 2	-4.0	-0.2	5.4	-8.7		8.8
KR 3	-2.1	0.2	-1.2	-5.4	0.1	8.4
KR 4	0.2	0.7	0.4	-6.5	1.1	8.1
KR 5	-3.9	0.6	2.6	-7.9		12.1
平均	-2.2	0.5	0.9	-6.2	*0.6	8.6

	正答率と回答内訳				
	正答率	否定	問返	肯定	推量
KR 1	93%	39	2	0	1
KR 2	86%	36	4	1	1
KR 3	93%	39	3	0	0
KR 4	88%	37	4	1	0
KR 5	86%	36	5	1	0

6. まとめ

韓国語を母語とする日本語学習者が「これじゃない」の4種類の発話意図を

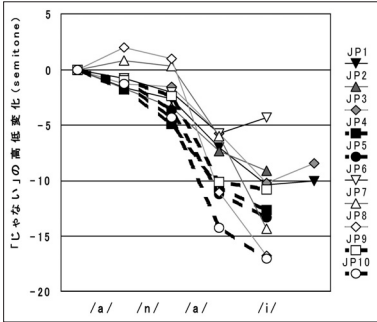


図12 発話者 J P の「肯定」発話における「じゃない」の高低変化

表17 発話者 J P の「肯定」発話における「じゃない」の高低変化

	(単位: semitone)				ピッチレンジ
	/a/	/n/	/a/	/i/	
J P 1	-1.6	-1.0	-4.4	-3.4	10.3
J P 2	-1.7	-1.7	-3.9	-1.8	9.2
J P 3	-1.3	-0.2	-4.2	-4.5	10.3
J P 4	-1.8	-3.1	-5.7	-2.0	12.6
J P 5	-0.9	-2.7	-7.6	-2.1	13.4
J P 6	-0.8	-1.2	-3.7	-1.4	7.2
J P 7	0.8	-0.5	-6.3	-8.3	15.3
J P 8	2.0	-1.0	-12.0	-5.8	19.3
J P 9	-0.9	-1.5	-7.7	-0.7	11.4
J P 10	-1.3	-3.0	-9.9	-2.8	17.1
平均	-0.8	-1.6	-6.5	*1.1	12.6

* 2名平均

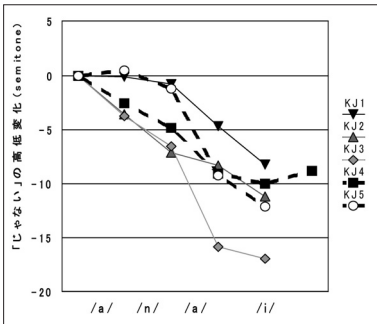


図13 発話者 K J の「肯定」発話における「じゃない」の高低変化

表18 発話者 K J の「肯定」発話における「じゃない」の高低変化と聴取結果

	(単位: semitone)				ピッチレンジ
	/a/	/n/	/a/	/i/	
K J 1	-0.1	-0.7	-3.9	-3.5	8.4
K J 2	-3.6	-3.5	-1.2	-2.9	11.2
K J 3	-3.7	-2.8	-9.3	-1.1	17.2
K J 4	-2.6	-2.2	-4.3	-1.5	10.4
K J 5	0.5	-1.7	-8.0	-2.9	12.7
平均	-1.9	-2.2	-5.3	-2.4	12.0

	正答率と回答内訳				
	正答率	否定	間違	肯定	推量
K J 1	95%	0	2	40	0
K J 2	83%	6	1	35	1
K J 3	83%	1	5	35	1
K J 4	93%	0	2	39	1
K J 5	93%	0	3	39	0

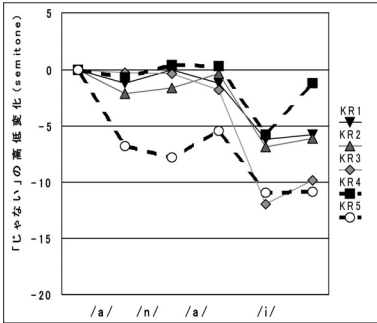


図14 発話者 K R の「肯定」発話における「じゃない」の高低変化

表19 発話者 K R の「肯定」発話における「じゃない」の高低変化と聴取結果

	(単位: semitone)				ピッチレンジ
	/a/	/n/	/a/	/i/	
K R 1	-1.2	1.2	-1.2	-5.0	6.2
K R 2	-2.1	0.5	-1.2	-6.5	7.2
K R 3	-0.3	-0.1	-1.4	-10.1	11.8
K R 4	-0.7	-1.1	-0.1	-6.1	6.2
K R 5	-6.8	-1.0	2.4	-5.5	10.9
平均	-2.2	0.3	0.2	-6.6	8.5

	正答率と回答内訳				
	正答率	否定	間違	肯定	推量
K R 1	0%	42	0	0	0
K R 2	2%	38	2	1	1
K R 3	12%	1	11	5	25
K R 4	3%	40	0	1	1
K R 5	0%	36	6	0	0

どのように区別しているか、発話資料を用いて日本語母語話者に判定してもらったところ、日本在住学習者である K J の発話と韓国国内学習者である K R の発話との間で判定に差があることが分かった。話者別に見ると、K R では

「否定」を除く発話に対する正答率が低く、特に「問い返し」を「推量」に、「肯定」を「否定」に聞き取られていることが明らかになった。KJでは「問い返し」が「推量」に聞き取られている例があることが分かった。

そこで、異なる発話意図に聞き取られた発話について発話者別に音響分析を行ったところ、特にKRにおいては、「問い返し」と「推量」では「じゃない」における下降-文末上昇の違い、「肯定」と「否定」では文末下降の違いを区別して発話することができず、「否定」と「推量」の2つのパターンでしか発話できていないことが明らかになった。これが聴取で異なる判定を引き出す原因になったと考えられる。

一方、KJの発話に関しては、聴取の正答率も高く、音響的特徴も日本語母語話者のそれに近いことが分かった。KJの多くは長期にわたって日本に滞在しているので、このような結果も至極当然とも思えるが、発話意図によってイントネーションが異なるということを、単に知識として持っているだけでなく、実際の発話でも問題なく実現できることが明らかになった。

学習者間でこのような差が生じた原因としては、当然ながら学習歴、学習環境（実際に日本語に接触する機会）、イントネーション教育の経験等、様々な側面におけるレベルの相違が考えられる。ただ、発話意図をイントネーションを変えて区別するのが難しいことが判明したKRでも「否定」の発話意図は正しく日本語母語話者に伝えることができている。この現象は「韻律の形式と発話意図の関係は教育でカバーできる」⁸⁾ という指摘を支える一例と見なすこともできる。今後は、音響的な特徴が聴覚的なcue（キュー）になっているかどうかなどについて、合成音声を使用した実験が必要であると考えられる。

注

- 1) 「～ない」に限らず、発話意図の分類・定義については、後続研究の中で様々な事例が見られるが、未だ定説のないのが現状といえる。
- 2) 御園生（2003）の4分類のうち、「否定」「肯定」「念押し・確認」は、それぞれ本研究における「否定」「肯定」「推量」に相当する。御園生（2003）の「yes-no疑問文」は、yesかnoかどちらなのかという疑問を、否定の形を用いて相手に問う、という発話意図があると考えられる。一方、本研究の「問い返し」は、単に相手の発話を反復して聞いているだけであり、相手に正否を問うてはいない。
- 3) 関（1989）は日本語話者による韓国人学習者の発話の評定、崔（2003）は

合成音声に対する韓国人学習者の評定である。

- 4) 録音は、発話者K JおよびJ Pについては東京外国語大学録音室、発話者K Rについては釜山外国語大学日本語科研究室で行った。発話者の発話をマイクロホン（SONY製エレクトレットコンデンサタイプ）、オーディオデバイス（Roland UA-3）を介してノート型パーソナルコンピューター（東芝 Libretto L5/080TNKW）のHDDにWAVファイル形式（16bit、44.1kHz、モノラル）で直接録音した。
- 5) 原則として、2回発話してもらったうちの2回目の録音データからピッチ曲線を抽出した。
- 6) 2つの音の間のF0の数値（Hz）を対数化したもの。物理的には同じ100 Hzの高低変化でも、高音域と低音域とでは聴覚的に異なる（低音域の方が音が高くなった（もしくは低くなった）と聞かれる）。発話者の声の高さにかかわらずにF0の変化幅を比較するため、この数値を使用した。換算式は、 $\text{semitone} = 39.86 \times \log_2 f_1 / f_2$ （ただし、 f_1 は基準となるF0値（本稿では50Hz）、 f_2 は当該音のF0値）である。この計算によるセmiton値（st）とF0値の対応を例示すると、以下の通りとなる。20st=159Hz、25st=212Hz、30st=283Hz、35st=378Hz。
- 7) 「じゃ」の子音部分は、発話者によってピッチ曲線が途切れる場合がある（閉鎖の程度に個人差があるものと推測される）ため、共通して安定したF0値が測定できる、母音の開始点を基点とした。
- 8) 松崎（1999）、32ページ。

参考文献

- 鮎澤孝子（1991）「イントネーションと日本語教育」『日本語学』11-7：98-113、東京：明治書院。
- 李明姫（1994）「韓国人学習者の日本語疑問文韻律の習得—釜山地方学習者の場合—」『日語日文学』2：70-94、ソウル：大韓日語日文学会。
- 李明姫（1995）「韓国人学習者の日本語の疑問文に見られる母語の韻律の干渉—ソウル地域の学習者の場合—」『日本学報』34：91-119、ソウル：韓国日本学会。
- 郡 史郎（1997）「日本語のイントネーション型と機能—」『日本語音声（2）アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』：169-202、東京：三省堂。

- 田川恭識・田渕咲子・甲斐朋子・宮園博光・馬場良二（2001）
「発話の感情知覚に及ぼす韻律要因の影響」2001年度日本音声学会全国大会予稿集：25-30.
- 田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152：109-123、東京：国語学会.
- 崔壮源（2003）「日本語らしさの許容度の実態調査－アクセント核の移動が影響する日本語らしさ－」2003年度日本音声学会全国大会予稿集：213-218.
- 西端千賀子・浅田健太朗・篠崎大司・徐 愛紅・夢田美有紀・細田和雅（1996）
「[ア]と[エ]で表出される感情の韻律的特徴」『感情・態度を表す日本語音声の表出診断・訓練プログラムの構築に関する研究』平成7年度科学研究費補助金〔一般研究（B）〕研究成果報告書：21-38.
- 福岡昌子（1998）「イントネーションから表現意図を識別する能力の習得研究－中国4方言話者を対象に自然・合成音声を使って－」『日本語教育』96：37-48、東京：日本語教育学会.
- 松崎 寛（1999）「韓国語話者の日本語音声－音声教育研究の観点から－」『音声研究』3-3：26-35、東京：日本音声学会.
- 三木 理（2004）「「じゃない」の発話意図とイントネーション－聴取実験に基づく考察－」2004年度日本語教育学会春季大会予稿集：203-208.
- 三木 理（2006a）「「きれいじゃない」の発話意図とイントネーション－ピッチパターンの分析」2006年度日本音声学会全国大会予稿集：99-104
- 三木 理（2006b）「「これじゃない」の発話意図とイントネーション－ピッチパターンの分析」日本音声学会第314回研究例会（発表要旨『音声研究』11-1：111、東京：日本音声学会.）
- 御園生保子（2000）「文末に現れるジャンナイの用法と韻律の分析をめぐる問題について」『日本語 意味と文法の風景－国広哲弥教授古稀記念論文集－』：343-355、東京：ひつじ書房.
- 御園生保子（2003）「発話表現意図にかかわる日本語文末形式・ピッチパターンの分析と指導法の開発」平成12～14年度科研費基盤研究（C）報告書.
- 南不二男（1985）「質問文の構造」（『朝倉日本語新講座4 文法と意味Ⅱ』：39-74、東京：朝倉書店.
- 宮城幸枝（1993）「韻律の特徴にあらわれる意図表現－「そうですね」の音響分析と意図表現の知覚」『日本語音声と日本語教育』「日本語音声」D1班 平成4年度研究成果報告書：19-40.

- 関光準 (1989) 「韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者による評価」『日本語教育』68:175-190、東京:日本語教育学会.
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語1』:339-343、東京:角川書店.
- 森山卓郎 (1989) 「文の意味とイントネーション」(『講座日本語と日本語教育』第1巻) 172-196、東京:明治書院.
- 森山卓郎 (2002) 『表現を味わうための日本語文法』東京:岩波書店.
- Boersma P. and D.Weenink (1992) 「Praat Ver4.2.02」(音声分析ソフト)

